
《論 文》

日本人 EFL 学習者による発話行為「招待・勧誘 (Invitation)」の習得について — 大学英語クラスにおける協同学習の取り組みと効果の検証 —

水 島 梨 紗

要 旨

本論では、外国語としての英語 (EFL) を学ぶ日本人大学生を対象に行った発話行為「招待・勧誘 (Invitation)」の指導プロジェクトについて報告する。授業で行った協同学習の取り組みを紹介するとともに、プログラムの中で実施した効果測定テストの結果から、学習を通じて学び手の知識にどのような変化が現れたかを論じていく。

キーワード：中間言語語用論，語用論的能力，発話行為，英語スピーチアクトコーパス，招待・勧誘

1. はじめに

本論は、筆者が2009年に大学英語クラスにおいて行った、発話行為「招待・勧誘」の指導プロジェクトについて紹介し、効果測定テストのデータに基づきその教育効果を検証するものである¹。このプロジェクトの目標は、日本人EFL学習者が相互的な学びを通じて当該の発話行為を習得し、それによって語用論的能力を向上させることにある。具体的には、英語コーパスを活用した協同学習により、学習者の「招待・勧誘」の発話行為に関する理解・産出能力を高めるとともに、言語の語用論的側面（話者の意図や文脈に即した発話ストラテジーなど）に対する気づきを喚起することを目指している。第2節では、まずこのような取り組みが進められている分野と先行研究について触れ、第3節以降で具体的なプロジェクトに関する解説および報告を行う。

2. 先行研究

本研究がその基盤を置く中間言語語用論は、「非母語話者の第二言語の語用論的知識の使用と習得の研究」(Kasper, 1996, p. 145) とされる。すなわち、外国語ないし第二言語としての外国語を学ぶ人々（以降L2学習者）が、実際の言語使用のコンテキストにおいて伝達・理解される語用論的意味や意図に関してどのような知識を持つのか、あるいは学習を通じてそのような知識

をどのように身に付けるのかを明らかにすることが、当該分野の主要な目的である(清水, 2009, p. iv 参照)。このことから、中間言語語用論は、第二言語習得と語用論という2つの学問領域の接点に位置する学際的な分野とされ、外国語教育においてその重要性が広く認められつつある「語用論的能力」(Bachman, 1990)、ひいては「コミュニケーション能力」(Hymes, 1972)の養成とも深く関わる領域として、近年注目を集めている(Kasper, 1996, LoCastro, 2003)²。

中間言語語用論が研究・教育の対象とする項目は、語用論の分野で扱われてきた「発話行為」(「スピーチアクト (speech act)」と同義)(Austin, 1962, Searle, 1969, 1979)や「含意」(Grice, 1975)を筆頭に、語用論的慣用句やスモールトーク、談話標識など多岐に渡る。これらの語用論的要素を扱うメリットは、単に語彙や文法といった形式的な側面だけでなく、発話に込められた意図や、伝え方そのもの(例: ポライトネス・ストラテジー³)のように、言語使用の側面に関する学習者の認識を深め、実際の会話に応用可能な知識を授けることができる点にある。

上述のとおり、中間言語語用論は、語用論における伝統的な理論や概念を指導対象の中心に据えてきたが、その中でも発話行為に関連する実証研究はひときわ充実している。これらの研究の目的は、L2学習者による発話行為の理解や産出の分析を通じて、話し手がどのように意図を伝えるのか、また聞き手がどのように話者の意図を理解するのか、そしてどのような場合に誤解が生じ得るのかといった問題を明らかにすることにある(清水, 2009, p. 16)。言うまでもなく、その先には、L2学習者が目標言語の社会文化的コンテキストにおいて目的とする「行為」を適切に行うための能力の養成が見込まれている。

ただし、いずれの目標言語においても、日々のコミュニケーションの中で用いられる発話行為の種類は多様であり、L2学習者によるそれらの使用や習得の様相を網羅的に検証することは困難である。実際、当該領域の先行研究が扱う発話行為の種類には偏りがあり⁴、「依頼 (Request)」(Blum-Kulka, House & Kasper, 1989, Trosborg, 1995)、「謝罪 (Apology)」(Olshtain & Cohen, 1983)、「断り (Refusal)」(Takahashi & Beebe, 1987, Beebe, Takahashi & Uliss-Weltz, 1990)、「ほめ (Compliment)」(Manes & Wolfson, 1981)、「感謝 (Gratitude)」(Coulmas, 1981, Eisenstein & Bodman, 1986)、「不平 (Complaint)」(Olshtain & Weinbach, 1987)といった発話行為に議論が集中する傾向がある(清水, 2009)。その一方で、「提案 (Suggestion)」や「申し出 (Offer)」などの発話行為に関する研究は限られており、本論の取り上げる「招待・勧誘 (Invitation)」に至っては、筆者の知る限り、ほとんど報告がなされていない⁵。

ただし、このような先行研究数の偏りは、必ずしも対象とする発話行為の重要性や使用頻度の多寡を反映したものではない。「招待・勧誘」もまた日常的に行われるものであり、対人関係の構築、維持・向上に寄与し得る発話行為である。次節では、そのようなはたらきを持つ発話行為の習得を目指して行った、大学英語クラスにおける実践指導の概要と、指導プログラムの内容について紹介する。

3. 指導計画および効果測定テストの概要

当指導プロジェクトは、2009年度前期に、全学共通科目としての英語リーディングクラスを履修した日本人大学生（学部1年生）向けに行った。総受講生数は86名で、そのうち3度に渡り実施した効果測定テストのすべてに参加し、かつその結果の公表に同意した69名分のデータを分析の対象とした⁶。

各週の授業計画については、表1のとおりである。当授業は本来、テキスト講読を中心とするリーディングのクラスであるため、毎回90分のうち60分を通常授業に、残りの30分を発話行為の指導に充てた。

表1. 授業計画（一は「指導なし」を表す）

	通常授業（60分）	スピーチアクト指導（30分）
第1週	初回オリエンテーション	—
第2週	通常授業（リーディング）	イントロダクション
第3週		Pretest
第4-10週		スピーチアクト指導
第11週		Posttest
第12-13週		—
第14週		Delayed Posttest
第15週		自己評価アンケート

講義期間は計15週で、第1週は通常授業向けのオリエンテーションを実施したため、当プロジェクトは第2週より開始した。翌週の事前テスト（以降Pretest）に先立ち、イントロダクションとして「発話行為」すなわち「行為」としての言語のはたらきに関する平易な解説シートを作成・配布し、指導の目的と意義、目標などについて学習者の理解を促した。

第3週のPretestは、学習者が指導前の時点で持ち合わせている文法知識や語用論的知識を問う目的で実施した。テストは発話行為「招待・勧誘」の理解能力 (Receptive Skill) と産出能力 (Productive Skill) の双方を測るため2部構成とし、前者は他者による発話行為の識別を想定した全20問の選択問題、後者は自身が会話の中で発話行為を実践することを想定した記述問題である。Productive Skill用の記述式テストでは、2種類のシーン（「相手を自宅などに招く」場合と、「外出に誘う」場合）を設定し、それぞれにつき3通りの異なる言い回しを用いて解答するよう指示した（巻末資料を参照）。これらの設問形式は、指導後の事後テスト (Posttest)、および定着を確認するための遅延事後テスト (Delayed Posttest) との間で統一させたが、問題慣れを防ぐため、

それぞれの問題のレベルに差が出ないように配慮した上で、問題の内容を変えてある。

4. 指導内容

当プロジェクトにおけるスピーチアクト指導では、「英語スピーチアクトコーパス」⁷を活用するとともに、グループ学習の枠組みを導入した。これにより、学習者は多くの英語ネイティブスピーカーが日常的に使用する「招待・勧誘」の表現データに直接触れることができ、またグループのメンバーと理解を分かち合いながら学びを進めることが可能となった。

スピーチアクト指導が開始された第4週から第5週にかけて、学習者は各自に配布された英語コーパスのデータを観察し、表現パターンごとに色分けしたり、英語の母語話者がどのような表現を使う傾向にあるかを確認したりした。また、その結果を自身のPretestの解答と比較し、気づいた点をグループの他のメンバーとのディスカッションを通じて共有した。この時点で、学習者は既に、英語ネイティブスピーカーの用いる表現に明らかな特徴があること（例：“Would you like to…?” や “Do you want to…?” という形式や、‘if’ をともなう仮定法や条件法が頻繁に使われる）、また自分たちが自然な表現だと信じて使っていた表現（例：“Let’s…” “Shall we…?”）がデータにほとんど現れないことなどに気づいていた。

第6週から第8週にかけては、データから抽出した表現パターンを使用し、自身らで考えた5種類以上のシーンにおける会話スクリプトを作成した。学習者には、誘いを受け入れる事例と断る事例との両方を盛り込むなど、幾つかの条件が与えられ、さらにグループ内でロールプレイを行うことで、その会話スクリプトに含まれる表現パターンを暗記するよう指示された。

第9週には、各自がグループから離れて教室内を自由に移動し、異なるグループの人同士で会話練習をした。そこでは、筋書きの無いやりとりの中でも臨機応変に対応することが求められ、想定外の展開になった場合にはどのような措置が必要かという点について、自由に意見を述べ合った。最終週の第10週にはまたグループに戻り、第6-8週で取り組んだ会話スクリプトの実演テストを行った。

上記の実践内容から明らかなように、当プロジェクトにおけるトレーニングは、発話の産出にターゲットを絞った形で行われた。このような取り組みにより、目的とする発話行為の産出能力のみならず、理解能力にも変化が現れるかどうか——この問い、すなわち効果測定テストの結果については、次節で紹介する。

5. 効果測定テストの結果と考察

ここでは、まず発話行為の理解・識別に関するReceptive Skill用のPretest, Posttest, Delayed Posttestの結果から報告する。先述のとおり、こちらのテストは選択式の問題を各20問

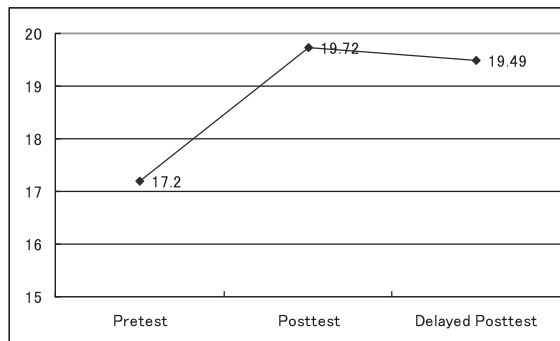
ずつ用意し、1問1点として採点した。指導前後での平均点の変化は表2が示すとおりである。

表2. Receptive Skill用テストの記述統計

	度数	平均値	標準偏差
Pretest	69	17.20	2.655
Posttest	69	19.72	.539
Delayed Posttest	69	19.49	.678

表2の記述統計から平均点の推移を見てみると、Pretestの時点では17.2点だったが、Posttestではほぼ満点の19.72点、Delayed Posttestではやや下がって19.49点となったものの、依然として高得点を維持していた⁸。また、標準偏差から明らかなように、点数のばらつきはPretestが最も大きく、Posttestで最小となった。図1は、このテストの結果をグラフにしたものである。

図1. Receptive Skill用テストにおける平均点の推移

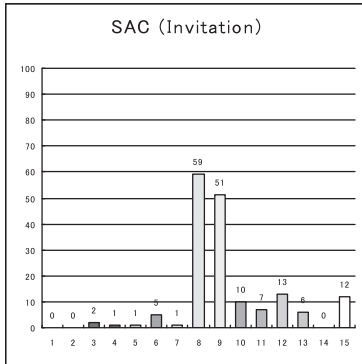


この結果について統計処理を行ったところ、等分散の検定で有意差が見られたため、ノンパラメトリック検定 (Kruskal Wallis) を使用し、その結果 $p < .001$ の水準で有意差が見られた。また、その後の検定 (Dunnett T3) においては、Pretest—Posttest間およびPretest—Delayed Posttest間でのみ有意差が見られ ($p < .001$)、Posttest—Delayed Posttest間では有意差が確認されなかった。

これらの数値が示すとおり、「招待・勧誘」の発話行為を識別する能力には、指導の前後で確実な伸びが確認された。先に述べたように、授業ではReceptive Skillを向上させるための特別なトレーニングを一切行っていない。このことから、発話の産出のための実践練習を繰り返す過程で、発話行為の理解に結びつく知識 (例: 「招待・勧誘」をめぐる英語表現のパターン) を新たに習得したものと考えられる。

次に、目標の発話行為を産出する能力、すなわちProductive Skillに関する効果測定の結果を見てみよう。こちらは、会話の相手を「自宅などに招く」場合と「外出に誘う」場合という2種

類のシーンを用意し、それぞれの場面に適した発話を3種類ずつ、異なる言い回しによって行うよう指示したが、いずれの場面に関しても、トレーニングの前後で学習者の解答内容に顕著な差が見られた(図3, 4)。このことについて、教材の「英語スピーチアクトコーパス」より抽出した英語母語話者の解答(図2)と比較しながら、発話行為の「主要行為部(head act)」⁹⁾に含まれる表現パターンの出現頻度を基に説明したい。



- <凡例>
- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1. Let's... | 9. Would you like to...? |
| 2. Shall we...? | 10. You should... |
| 3. Will/Can you...? | 11. I was wondering... |
| 4. How about...? | 12. ...if you want to. |
| 5. Why don't you...? | 13. head actなし |
| 6. (Please+) 命令形 | 14. 無解答, 非文 |
| 7. I want (you) to... | 15. その他 |
| 8. Do you want to...? | |

図2. 「英語スピーチアクトコーパス」(Invitation)における表現パターン内訳

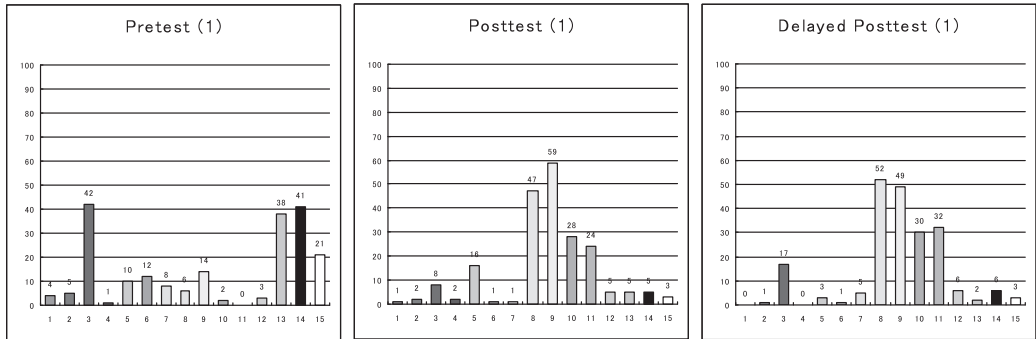


図3. 「相手を自宅などに招く」事例に対する学習者の解答内容内訳

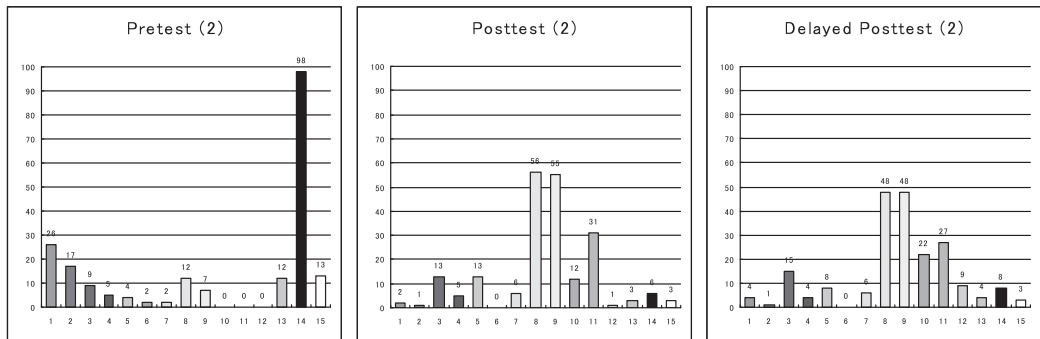


図4. 「相手を外出に誘う」事例に対する学習者の解答内容内訳

まず、図2における英語ネイティブスピーカーの解答内訳を見ると、第4節で学生の声を紹介したように、凡例8と9に当たる“Do you want to…?”と“Would you like to…?”が突出して高くなっていることが分かる(全解答数の64%)。また、出現頻度では劣るものの、凡例11の“I was wondering if…”, 凡例12のような“… if you want to…”のように、仮定や条件を表す“if”を比較的多用する傾向がある。このことから、英語母語話者は主に相手の意思(誘いに乗りたくないか、乗りたくないか)を直接問うストラテジーを、“if…”を用いてニュアンスを和らげながら用いることが分かる。

このような英語母語話者の表現パターンを基準とした上で、今度は日本人学習者の解答(図3, 4)を見てみよう。まず事前テストについてであるが、Pretest(1),(2)(上下左端)の結果から明らかなように、指導前の段階では「無解答、非文」(凡例14)の比率が著しく高い。これは、「招待・勧誘」にふさわしい英語表現がすぐには思い浮かばず、解答欄に何も書けなかったか、書いても発話行為以前の統語的ないし意味的なレベルで非文となってしまう、結果として目標とする発話行為を実現できなかったということである¹⁰。また、このProductive Skill用のテストでは、1つの場面につき異なる3通りの言い回しを用いて発話を産出するように求めたが、知識の中にそのように多様な表現の蓄えが無いということで、1,2通りの記述に留め、残りは無解答という事例も少なからずあった。

さらに、上記の「無解答・非文」と並んで凡例13の項目も目立つが、こちらは主要行為部の無い発話で、例えば“Im having a party.”とだけ伝えて、残りの部分の言い切りを避け、意図をほのめかすようなやり方である。文脈によってはこのような言い回しが機能することもあるが、当プロジェクトでは曖昧な表現の使用は避け、聞き手が「招待・勧誘」であることを明確に認識できるような表現の習得を目指すという方針の下で、発話の際には極力主要行為部を含めるよう、指導の際には学習者への注意喚起を行った。

その他、統語的・意味的に正しい文として成立し、かつ「招待・勧誘」の発話行為と解釈し得る事例の中にも、学習者に特徴的な傾向が見られた。例えば、Pretest(1)の「相手を自宅などに招く」ケースでは、“Will/Can you…?”という表現パターンを用いた解答数(凡例1)が、英語母語話者のそれと比較して著しく高い。つまり、相手を誘うというよりも、相手に来て欲しいという「要請」に近い言い回しを多用していることになる。

また、Pretest(2)の「相手を外出に誘う」ケースでは、“Let’s…”および“Shall we…?”(凡例1, 2)の出現数が高くなっているが、図2が示すように、これらの表現はコーパス中の英語母語話者の解答には見られない。したがって、少なくとも本研究の調査によると、“Let’s…”や“Shall we…?”という表現パターンの使用は、英語母語話者の発話傾向とは別の部分で、日本人学習者に浸透していることが分かる。

Pretestの後にグループディスカッションを行った際、学習者は自身らの想定した発話と英語母語話者の発話との間に違いを認め、その原因について話し合った。そこでは、口頭で以下のようなコメントや感想が寄せられた。

- “Do you want to…?” が、純粋な質問ではなく、誘いのための表現として使えることを、そもそも知らなかった。
- “Do you want to…?” は、日本語に訳すと「～したいですか」となり、“Would you like to…?” はそれを丁寧にした感じではあるが、いずれも歓迎の意が伝わらない気がして、使うのに抵抗がある。
- 誘いたい気持ちや歓迎の意を積極的に示すために、「一緒に～しましょう」という意味の “Let’s…”, “Shall we…?” が適当だと思っていた。

筆者がこれらの点を総合して解釈したところ、「勧誘・招待」という発話行為のあり方について、英語母語話者と学習者の間にある認識の差が浮かび上がってきた。すなわち、英語ネイティブスピーカーが会話の相手を誘う際には、その人物個人の意思を問う形で、YesかNoかの選択を委ねる。その際、条件や仮定を表す ‘if’ を重用することで、ネガティブ・フェイス¹¹への配慮を示す戦略とするのである。これに対し、日本人学習者は「要請」や「呼び掛け」に近い表現を用いることで自身の欲求や関与を強調し、積極的な歓迎の意を表す。このような見解の差は、“Do you want to…?”, “Would you like to…?” のような二人称の主語と、“Let’s (Let us) …”, “Shall we…?” という一人称複数主語の対比にも象徴されているように思われるが、この点については、学習者の母語である日本語のデータと照らし合わせた、より慎重な議論が必要である。

これまで、Pretestの結果が示す、英語母語話者と日本人学習者による表現の違いについて述べてきた。ここからは、指導プログラムを通じて学習者の解答に生じた変化を、効果測定テストの時系列的な観察を基に検証していく。まず、Pretestの段階で非常に多かった「無解答・非文」の割合が、Posttest, Delayed Posttestでは大幅に減少したが、これはコーパス学習やロールプレイを通じて多様な英語表現に触れ、知識が拡張されたことの効果によるものと考えられる。また、Pretestの段階で多く見られた “Let’s…”, “Shall we…?” の使用が減少し、代わりに英語母語話者が頻繁に用いた “Do you want to…?” と “Would you like to…?” の割合が上昇した。加えて、指導前はほとんど使用されなかった “You should…”, “I was wondering…” といった表現も多く使われるようになった。¹²

ここで重要なのは、学習者が単に英語母語話者による発話の表層を真似たのではなく、「なぜそのような表現が用いられるのか」という問いの下で、より深い気づきを得た点にある。このことが、それまで自身らが自然な英語と信じて使用してきた表現の見直しにつながるるとともに、語彙や文法といった形式的な側面に対する理解の糸口になることが期待される。

今回のプロジェクトでは、カリキュラム上の制約により、PosttestからDelayed Posttestまでの期間が2週間しか確保できなかった(表1参照)。指導後の両テストの結果により、この間の知識の定着は確認されたが、より長期的な定着の具合を把握するためには、さらなる追跡調査が必要である。

6.まとめと展望

これまで、発話行為「招待・勧誘」の理解・産出能力養成のための取り組みと、学習者による語用論的知識の習得の様相について報告してきた。効果測定テストの結果は、当該の発話行為に関する運用能力の伸びを客観的に示すものであるが、これが指導による学習効果であることを確実に立証するために、統制群との比較が望まれるところであった。

ただし、この度のプロジェクトの成果は、単なる点数上の伸びに留まらない。指導が始まった当初、学習者は「行為としての発話」という概念自体に意外性や戸惑いを感じているようだったが、実践的なトレーニングを通じて発話行為や話者の意図といった語用論的側面への理解が深まり、プロジェクト終了時には、ほぼ全員が当該の発話行為の運用に関する能力の伸びを実感するようになった。また、コーパスに含まれる「本物の」英語表現に触れ、英語母語話者が行う発話の動向に触れることに意義を見出しており、実際のコミュニケーションへの応用についても前向きな姿勢を示すようになったことは、大きな収穫である。さらに、受講生の多くが、グループワークやロールプレイといったタスク中心の取り組みに対し高評価を与えており¹³、語用論的気づきの相互作用を目指して行ったグループワークやロールプレイの手法も、奏功したと言える。以上の点を総合すると、今回の指導プロジェクトの目標（発話行為の学習を通じた理解・算出能力の育成）は、おおむね達成されたと見なして良いだろう。

しかし、その一方で、いくつかの課題も見えてきた。まず、今回取り上げた「招待・勧誘」の発話行為を現実の自然会話に即して実践するためには、参与者同士が出会い、一連のやりとりを終えて別れるまでの、より長い談話を想定した練習を行うべきであったが、今回のプロジェクトでは、学習者がターゲットとする複数の表現パターンを効率良く身に付けることを優先し、数ターンの発話から成る、非常に短い会話のロールプレイ・タスクを課すに留めた。また、時間の制約上、発話に伴う非言語的要素（表情、ジェスチャーなど）についても、限定的な指導しか行えなかった。「招待・勧誘」は、参与者間の交流のきっかけとなることから、対人関係の構築や維持に寄与する発話行為であり、そのような発話行為の遂行に関わる様々な談話ストラテジーについて、より広い視点から学習者の理解を促すことが重要である。

また、指導の対象とする発話行為の数についても検討の余地がある。学習者からは、英語の発話行為に様々な種類があることを知った以上、「招待・勧誘」以外のケースについても学びたかったという声が多数寄せられた。実際、英語を用いた総合的な会話運用能力を養うには、複数の発話行為（少なくとも日常会話で頻出するもの）を身に付けることが理想である。しかし、種類の発話行為にも多くの表現パターンが存在するため、授業で取り上げられる発話行為の種類には限りがある。特に、教員による一方的な講義ではなく、協同学習のような学生主体の学びの形式を取る場合には、それに足るだけの学習時間を確保しなければならない。この点は、本研究のみならず、発話行為を扱う介入型研究全般に共通する課題と言えよう。

この度のプロジェクトでは、目標言語による発話行為の実践指導の意義と重要性が再確認された。今後、学習者の意欲や関心をより高めるような指導法やタスク（例：母語データとの比較、中学校・高校で使用した英語テキストの振り返りなど）を開発し、順次導入していくことを中長期的な目標としたい。

註

- 1 当研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）2010-12年度「英語・日本語・中間言語スピーチアクトコーパスの構築と、その英語教育への応用」：課題番号22520410）を受けて行われた。
- 2 紙幅の都合上、本稿では「コミュニケーション能力」と「語用論的能力」の定義、および両者の関係に関する説明を割愛する。水島（2011, p. 19）、より詳しくは清水（2009, pp. 3-14）を参照のこと。
- 3 「ポライトネス・ストラテジー」とは、Brown & Levinson（1987）による概念であり、相手との関係（社会的距離、権力差）や発話による押し付けの度合いなどに配慮し、適切な発話のあり方を選択する方策を指す。
- 4 Kasper & Blum-Kulka（1993）、Kasper（1998）参照。
- 5 参考までに、発話行為に関連する先行研究の一覧が、Kasper（1997, 2001）、滝本（2007）、清水（2009）により提供されている。
- 6 当プロジェクトにおいては、大学機関における教育的配慮から、比較対照のための統制群の設置を行わなかった。したがって、本件で扱うデータはすべて実験群から得られたものである。
- 7 「英語スピーチアクトコーパス」の詳細と、授業での使用実践例については、Suzuki（2008, 2009）、水島（2010, 2011）で紹介されている。
- 8 Receptive Skill用テストの、Pretestの段階での信頼性は「.762」という結果だった。このことから、平均点は高いものの、このテストにはおおむね信頼性があるものと見なす。
- 9 ここでの「主要行為部（head act）」とは、発話全体の中で「招待・勧誘」を実現する部分を指す。例えば、“Robin, what are you doing tonight? Would you like to come over to my house for a party tonight?”という発話においては、“Robin”が「注意喚起部（alerter）」、“what are you doing tonight?”が「補助手番部（supportive move）」、そして“would you like to come over to my house for a party tonight?”が「主要行為部」となる（例文は「英語スピーチアクトコーパス」より抜粋）。これらの分類モデルの詳細については、Blum-Kulka, House & Kasper（1989）を参照のこと。
- 10 統語的・意味的非文の一例として、“Let’s come to the party in my house tomorrow.”のような解答が挙げられる。
- 11 「ネガティブ・フェイス」とは、自身のテリトリーを保持し、他者からの干渉や押し付けを避けたいという、個人の欲求を表す（Brown & Levinson, 1987）。
- 12 ただし、凡例12の“…if you want to…”に関しては、統語的複雑さを敬遠したためか、使用が伸び悩んだ。この原因に関しては、別途議論の対象としたい。
- 13 これらの評価は、最終週（第15週）に実施した、学習者による自己評価アンケートに基づく。詳細については、水島（2011）を参照のこと。

巻末資料

効果測定テストのサンプル (Pretest より)

【Receptive Skill用テスト】

次の英会話 (① - ⑩) で, A の発言 (下線部分) が B に対する “Invitation” (誘い) と考えられるものをすべて選択し, 解答欄に番号を記入してください。

①

A: Wow, what a cute dog!

B: Thanks.

A: And so sweet! What's his name?

②

A: Do you want to go to lunch?

B: Sure, what time?

A: 3 o'clock.

B: OK, I'll meet you there.

A: Great.

③

A: Dad, I'm sick of eating the same old food all the time.

B: Well, Sarah, we should go out to eat, then.

④

A: Thank you for coming to my party.

B: You're welcome, it was fun.

⑤

A: Why did we get so much homework?

B: I don't know, but it's a lot huh?

A: Yeah.

⑥

A: Annie, I like your new haircut.

B: Thanks. I got it cut last night.

⑦

A: Nicky's birthday party is Saturday at 1:00 p.m. if you want to come.

B: O.K. I will see you there.

(※ 以降, ⑩まで続く。)

【Productive Skill用テスト】

(1), (2) のような場面で, あなたはそれぞれのどのような言葉を用いて相手を誘いますか。考えられる表現のサンプルを, 日本語 (J) と英語 (E) で3種類ずつ, 言い回しを変えながら書いてください。

(1) 明日, 自宅で開く予定のパーティーに友人を誘う場合

<英語>

A: _____
B: Sure. What time?
A: Around 5 o'clock.

E1. _____

E2. _____

E3. _____

(2) 今日の夜, 映画『トワイライト』(*Twilight*) を見に行こうと友人を誘う場合

<英語>

A: _____
B: Sure, what time?
A: At 7: 30.
B: Great. I'll be there!

E1. _____

E2. _____

E3. _____

(※ 日本語表現 (J1-J3) の記述欄は省略する。)

引用文献

- Austin, J. L. (1962). How to do things with words: The *William James Lectures delivered at Harvard University in 1955*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bachman, L. F. (1990). *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. C. Scarcella, E. S. Andersen & S. D. Krashen (Eds.), *Developing communicative competence in a second language* (pp. 55-73). New York: Newbury House.
- Blum-Kulka, S., House, J., & Kasper, G. (1989). Investigating cross-cultural pragmatics: An introductory overview. In S. Blum-Kulka, J. House & G. Kasper (Eds.), *Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies* (pp. 1-34). Norwood, NJ: Ablex.
- Coulmas, F. (1981). Poison to your soul: Thanks and apologies contrastively viewed. In F. Coulmas (Ed.), *Conversational routine: Explorations in standardized communication situations and prepatterned speech* (pp. 69-91). The Hague: Mouton.
- Eisenstein, M., & Bodman, J. W. (1986). "I very appreciate": Expressions of gratitude by native and non-native speakers of American English. *Applied Linguistics*, 7, 167-185.
- Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. L. Mogan (Eds.), *Syntax and semantics 3: Speech acts* (pp. 41-58). New York: Academic Press.
- Hymes, D. (1972). On communicative competence. In J. Pride & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics: Selected reading* (pp.269-293). Harmondsworth: Penguin.
- Kasper, G. (1996). Introduction: Interlanguage pragmatics in SLA. *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 145-148.
- Kasper, G. (1997). Can pragmatic competence be taught? [HTML document]. Honolulu: University of Hawai'i, Second Language Teaching & Curriculum Center. <http://www.nflrc.hawaii.edu/NetWorks?NW06/> [access: February 16, 2012]
- Kasper, G. (1998). Interlanguage pragmatics. In H. Byrnes (Ed.), *Learning foreign and second languages: Perspectives in research and scholarship* (pp. 183-208). New York: Modern Language Association of America.
- Kasper, G. (2001). Classroom research on Interlanguage pragmatics. In R. Rose & G. Kasper (Eds.), *Pragmatics in language teaching* (pp. 33-60). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kasper, G., & Blum-Kulka, S. (1993). Interlanguage pragmatics: Introduction. In G. Kasper & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlanguage pragmatics* (pp. 3-17). New York: Oxford University Press.
- LoCastro, V. (2003). *An introduction to pragmatics: Social action for language teachers*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Manes, J., & Wolfson, N. (1981). The compliment formula. In F. Coulmas (Ed.), *Conversational routine: Explorations in standardized communication situations and prepatterned speech* (pp. 115-132). The Hague: Mouton.
- Olshtain, E. & Cohen, A. D. (1983). Apology: A speech act set. In N. Wolfson & E. Judd (Eds.), *Sociolinguistics and language acquisition* (pp. 18-35). Rowley, MA: Newbury House.
- Olshtain, E., & Weinbach, L. (1987). Complaints: A study of speech act behavior among native and nonnative speakers of Hebrew. In J. Verschuere & M. Bertuccelli-Papi (Eds.), *The pragmatic perspective: Selected papers from the 1985 International Pragmatics Conference* (pp. 195-208). Amsterdam: Benjamins.
- Searle, J. R. (1969). *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. R. (1979). *Expression and meaning: Studies in the theory of speech acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Suzuki, T. (2008). A corpus-based study of the speech act of 'comforting': Naturalness and appropriateness

- for English language teaching. *The Proceedings for the 13th Pan-Pacific Association of Applied Linguistics* (PAAL 2008), 77-80.
- Suzuki, T. (2009). A study of lexicogrammatical and discourse strategies for 'suggestion' with the use of the English speech act corpus. *The Cultural Review*, 34, 131-159.
- Takahashi, T., & Beebe, L. M. (1987). The development of pragmatic competence by Japanese learners of English. *JALT Journal*, 8, 131-155.
- Trosborg, A. (1995). *Interlanguage pragmatics: Requests, complaints and apologies*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 清水崇文(2009)『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク
- 滝本将弘(2007)『英語の語用論的能力向上を目指すタスク活動』ユニオンプレス
- 水鳥梨紗(2010)『『英語スピーチアクトコーパス』の応用可能性と大学英語クラスにおける実践指導の試み』『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』6, 19-29.
- 水鳥梨紗(2011)『『提案(Suggestion)』に関する英語産出能力のための事例研究—『英語スピーチアクトコーパス』を活用した実践指導例』『札幌学院大学人文学会紀要』89, 71-86.

How do Japanese EFL students develop their pragmatic competence through cooperative learning ?:

The case of acquiring English speech act of 'Invitation'

MIZUSHIMA Lisa

Abstract

This paper is a report on an experimental teaching of the speech act of 'Invitation' to Japanese EFL students. The result of the pre- and posttest makes it evident that the students' receptive and productive skills for inviting others have been improved through the instruction and cooperative learning experience.

Keywords: Interlanguage pragmatics, Pragmatic competence, Speech act, English Speech Act Corpus, Invitation

(みずしま りさ 札幌学院大学人文学部講師)